

クリエイティブ・エコノミー

創造性こそ経済発展の源

(四六六字)

経済の中心を担う産業は時代によって変わる。二〇世紀は工業が発展し、大量生産、大量消費という生活スタイルを生み出した。が、それが行き詰まった現在、消費傾向は「モノ」から「コト」へ変化し、経済の中心はサービス業にシフトしている。さらにこの先はAIの進歩により、専門的な判断をともなう業務さえAIが担うようになると予測されている。

経済的に先行き不透明な中で、世界に注目されているのが「クリエイティブ・エコノミー（創造経済）」だ。これは単に芸術、エンターテインメント系のコンテンツだけを指すのではなく、創造性が経済発展の大きな源泉となる経済システム全体を表す言葉である。

例えば、地方の芸術祭を考えると分かりやすい。農村に多数の芸術作品を置く芸術祭には、毎年、数十万人が来場する。地域の知名度やブランド力が上がるうえ、数十万人分の宿泊・飲食需要により地域経済は活性化する。文化・芸術には、それだけの力があるのである。

デザインなども含めた創造性の価値を、いかに経済的な価値と結び付けることができるか。これからの社会の発展は、この点がかギとなる。

プレジジョン・メデイシン

患者一人ひとりに適した医療

(四四九字)

「プレジジョン・メデイシン」は「精密医療」と訳されることが多い。患者個人や疾患の遺伝子解析を行い、遺伝子情報をはじめとする生体情報をもとに、その人のその病気に適応する治療法や、より効果のある可能性の高い薬を精密に選んで処置する医療のことをいう。

例えば、がん治療の現場では、同じがん、同じステージの人に同じ治療をしても効果の出方がさまざまである。これまでは理由が分からず、まずは異なる薬、異なる療法を試してみるしかなかった。しかし、がん細胞の遺伝子を解析し、そのタイプに合った薬を用いることができれば、治療効果が高まり、不要な医療費も抑えることができる。

アメリカではプレジジョン・メデイシンの推進が国家戦略の一つであり、がんの治療法の開発や遺伝子情報の扱いなどに関する法整備を進めている。それだけではなく、いち早く人工知能も導入し、人間がカバーしきれない部分まで踏み込んで、効果的な治療法を探らせている。もちろん、日本でも導入が試みられつつあり、医療を効率化し得る方法として、大いに期待されている。

ヘルシースナッキング

間食して健康を保つ食習慣

(四四七字)

「ヘルシースナッキング」とはアメリカのセレブや若い世代に人気のある、間食を小まめにとるという新しい食習慣だ。

小まめな間食といっても、一日に何度も甘いお菓子を食することを勧めているわけではない。ヘルシースナッキングに適合しているのは、ナッツやヨーグルト、フルーツなどで、血糖値の急激な上昇をもたらさず、かつ、ある程度の満腹感を与える間食だ。食物繊維やタンパク質が豊富でヘルシーなものをちょこちょここととることで、極端な空腹になることを防ぎ、ドカ食いすることを避けるという点がポイントだ。

これにより、美容にも健康にも良い効果が出るというが、もちろん食べ過ぎては意味がない。間食の回数は食事の合間の小腹がすいてきたタイミングの1〜2回にとどめ、全体のエネルギー量も二〇〇キロカロリー程度までとするのが賢明だ。腹持ちのよい間食をはさむことで、次の食事が少なくすむようになり、間食を入れても、一日の摂取エネルギーの総量が一日三食のときより減る人も少なくないという。「食べて健康的にやせる」を実現する、魅力的な食習慣といえる。

シティ・ドレッシング

街全体をポスターなどで装飾

(四四七字)

「シティ」は「街」、「ドレッシング」は「服を着る」「化粧の仕上げをする」などの意味の言葉だ。つまり「シティ・ドレッシング」とは、街を飾りたてることをいう。

具体的には、大きなイベントのプロモーションなど、特定の目的のために、大型ポスターやデジタルサイネージなどを集中的に掲示。そうして街全体を装飾し、熱意や盛り上がりを目に見える形で示す取り組みのことだ。日本ではとくに、二〇二〇年東京オリンピック・パラリンピックの招致活動の際に大々的に展開された。最近では二〇一六年のリオデジャネイロ・オリンピックの後に、東京・日本橋で行われたシティ・ドレッシングが記憶に新しい。これは東京大会への機運を高めようと、三井不動産とオリンピック組織委員会が実施したものだ。デジタルサイネージによる選手の肖像の掲示、幅九メートルの三面LEDパネルでの映像上映など、迫力に満ちた映像が街を彩った。

やり方によっては、街の魅力の再発見につながることもできる。まちづくり施策の一環として戦略的に取り組むのも効果的かもしれない。